fct
GAZETTE

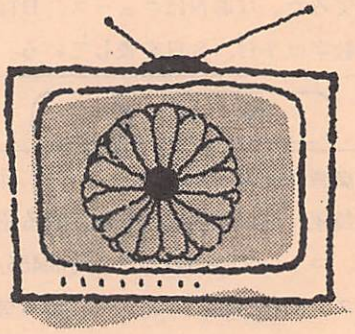
1989. 5
vol. 9
Number. 33

ガゼットは
テレビと市民
のデータバンクです

編集・発行／FCT（子どものテレビの会・市民のテレビの会）編集委員会 責任者・鈴木みどり
発行所・神奈川県葉山町長柄1601−27　購読料／年間（4回発行）¥2000（送料共）一部¥500（送料別）
第一勧業銀行逗子支店（普通預金1425785）　郵便振替　東京9−84097

■特集1

テレビと「天皇」



1月7日、8日の両日、テレビの天皇報道をきちんと見すえたいと、録画した人は多かったと思う。FCTテレビ診断グループでも各局担当者を決めて待機していたから、各々、画面をみつめ、VTRをまわしながら、この異様なテレビ体験を市民の側からどう総括するべきかを考えていた。

その後、テレビ、新聞、雑誌の「天皇報道」に関して多くの人が批判し、論評を加え、分析を行っており、それらの発言を収録する出版物も相次いでいる。「データバンク」でも要約・紹介してきたが、この作業の中で私たちが気づいたのは、二日間のテレビで明らかになった女性不在、天皇を頂点とする家父長制の根強さについての論考がほとんど見当らない、ということである。

そこで、FCTテレビ診断としては、この欠落した部分に的をしぼることにし、両日のテレビにどんな女性が登場したか、彼女たちは何を話したのかを、まず事実として次頁以下のように記録として残すことにした。この記録をどう読み、今日のテレビや社会のあり方の問い直しにどう使って行くかについては、次号で検討する予定である。

なお、本特集では、分析に加えて、両日の天皇報道への反応を滞日期間の長い二人の外国人の発言、公立中学生の声として収録した。

■CONTENTS■

○特集1　テレビと「天皇」
・FCTテレビ診断・テレビで女性は何を話し、語ったか …… 2
・中学生の反応 …… 5
・天皇を頂点とする家父長制の根強さ …… 8
・わたしの発言
考えるきっかけになった二日間 …… 9
開戦の重要な責任者としての天皇 …… 10
我が家の天皇問題 …… 11
○特集2　地方からテレビを考える(1)
アクセス—京都での一つの実験 …… 12
○FCTデータバンク
国内篇 …… 14

イラスト　市川雅美

■ ＦＣＴテレビ診断

テレビで女性は何を話し、語ったか。 ――1月7日，8日　ＰＭ6～11――

調査概要

1月7日(土)8日(日)　午後6時から11時の東京キー6局（教育テレビを除く）の全番組を録画。

各局担当者が、まず全登場人物をリストアップし、その中から女性について、服装、年令、コメントの内容、話した場所などを分析した。以下に各局別の傾向と、紙面に再録できる限りのコメントを列記し、この2日間、女性が何を語ったか、をまとめてみた。なおＮはニュース、Ｄは座談会その前の数字は7日、8日を表している。

ＮＨＫ

7日の調査時間帯の編成はニュース、回想天皇、ニュース特集、追悼座談会、映像で綴る昭和となっており、ニュース時間の合計3時間45分。8日はニュース、昭和回顧、ニュース、新天皇新時代（対談）で、ニュース時間の合計2時間30分。

7日の追悼座談会のスタジオ出席者は全員男性。8日の昭和回顧には作家の杉本苑子1人。コメンテーターとして女性の登場は若干あったが、総じてこの2日間男性の登場が多かった。レポーターにも若い女性ではなく中年男性の起用が目立った。

7日7時からニュースには多くの女性が登場した。

広島の原爆資料館に来ていた(60代、セーター姿で)・天皇さまの責任とかいうことではなくてもう戦争はいやです。

黒柳徹子（50代、黒いスーツ姿で）・やはり陛下はおっしゃりたいこと、考えていらしたことがたくさんあったと思います。それをすべてうかがえなかったことがとても残念です。

土井たか子（50代、黒いスーツ姿で、社会党委員長コメントとして）・昭和の時代は苦渋に満ちた時代でありました。この時代にきざまれた誤りの歴史は内外に大きな犠牲を強いて、その傷はなおいえたとはいえません……

渋谷街頭で（20代、ＯＬ、スーツ姿で）・わりと好きだったというか、こういうこと申し上げてはいけないんですか？

ロスアンゼルス在住（30代、セーター姿で）・ずいぶん御苦労があったと思いますが（突然すすりあげて）ごめんなさい、もうなにも言えません。

沖縄（50代、セーター姿）・私も戦争の犠牲者ですけれど、時代が時代だったから誰もにくめません。

橋本聖子（スケート、練習着姿で）・残念な気持でいっぱいです。園遊会でおめにかかった時に、やさしく励ましの声をかけていただきました。

高田ユリ（60代、黒いスーツ）・主婦連副会長として園遊会にお招き下さって、いつもの「あ、そう」ではなく、「良識ある政治が行われてほしいものですね」と言われました。暮しとか政治の問題にも理解をもち、誠実な方だとしみじみ思いました。

渋谷で（30代、ＯＬ）・やっとやすらかにおねむりになられたという感じがして、感無量です。

渋谷で（10代、コート姿）・長くてかわいそうだった！

原宿で買物中（10代）・ぜんぜん身近かじゃないから、そういう人がいたんだな、って……

瀬戸大橋観光中（50代）・雲の上の人はなかなか…

宮良ルリ（ひめゆり部隊生存者、沖縄で）・負ける戦なら沖縄までこないうちに負ければよかったなあと。亡くなった多くの人の死を語りつぐことをあらためて決心し、墓前に報告しました。

上坂冬子（評論家、黒スーツで）・病気についてのくわしい報道はとても人間的だったので、天皇がとても身近かな感じがして昭和が終ったという気がしています。新天皇の時代にはまた人々の英知の中で天皇の位置が決っていく、未知の時代になったのだと思っています。

8日7時からのニュースでは

皇居前広場記帳に来た母（40代、青ジャンパー赤セーター、娘中学生と小学生）・今日は歴史の変りめをこの目で子どもにハダで覚えさせようと連れてきました（母）。（皇居を見てどう、と聞かれて）とってもきれいだった(小)。・印象に残ると思い

ました(中)。

森田美由紀（ニュースキャスター、黒スーツ）•民間からお選びになった美智子様と結婚され、身近かな皇室づくりに心をくだかれました。御一家の明かるい様子は私たちにとってもなじみ深いものになっています。

渋谷でビデオショップにて(20代、ＯＬ）•テレビがちょっとぜんぶ同じなのでェ……

結婚式場で式をあげたばかり（ウェディング姿の20代）•結婚記念日がわかりやすくていいと思います（平成第１日について）しあわせです。

横浜中華街で10代(ジャンパー姿)•朝起きたらやっぱり違うんじゃないかと思ったけどべつに変わらんかった。

座談会昭和回顧で、**杉本苑子**(作家、胸にリボンのついたグレーワンピース）•ペンは剣より強いのか弱いのかということを自分の命題として考えていかなくてはと思うんです。国がファッショ化した時、学者は筆を折るという消極的な抵抗しか出来なかった。ほとんど体制にまきこまれてしまったわけです。

ＴＢＳ

両日共18:00ＪＮＮニュース、18:30ニュースコープ、22:00ニュースデスク'89の番組枠を使い、各地の表情、天皇の思い出、政財界の反応、新元号の感想などの取材で構成（ニュースデスクは７日は24:00まで延長、８日は23:00に変更)。またＶＴＲによる特別番組・天皇裕仁１～２部を７日、３～４部を８日に編成。８日はスタジオ座談会・検証昭和という時代（19:00～21:00）も。出席者は飯坂良明、内橋克人、宮崎勇、上坂冬子の４名。

大阪で新元号の感想をきかれ（白髪、70代、７日Ｎ）•まあ、私らは、いくらもないからいいですけど。若い人は呼びにくいんじゃないですか。

仙台で（10代、７Ｎ）•自分が生まれた年じゃない年号になるので、トシを感じます。

那覇で（40代、７Ｎ）•沖縄の場合、いろいろ戦争があったんですけど。みんなが協力して平和になるという気持をこめて、平成になったんじゃないかなって……。

東京・原宿竹下通りの二人連れ（10代、７Ｎ）•ウッソーって思った。ホントニーって感じ。平成１年になるのがイヤだ。何か、トシとった感じ。

栗原貞子（ヒロシマ詩人、70代、７Ｎ）•天皇の中にはね、ずっと大東亜戦争、太平洋戦争っていうものが、肯定的に生き続けていたんだと思うんですね。だから、天皇がいま亡くなられたということで、何だか私は第二の終戦っていうんですかね、第二の敗戦を迎えたような気がするんですよ。

渡辺絵美（元フィギャースケート選手、20代、黒いドレス、７Ｎ）•私なんか、オリンピックでがんばったということで、園遊会によばれて、お言葉をいただいて…。私としてみれば、何か、本当に優しいおじいちゃまが声をかけてくれたな、っていう感じがしたんですけれども。今日、しみじみ感じたのは、本当に、天皇陛下って、すごい方だったんだなァ、って。

黒柳徹子（50代、黒いドレス、７Ｎ）•天皇陛下のお考えになっていらっしゃること、お思いになっていらっしゃることを、私たちがもっと、たくさん、もし伺うことができたらば、ずい分よかったのにと思います。陛下もおっしゃれないことがたくさんあって、きっと、お亡くなりになったのではないかと思い、そのことが私は残念です。

土井たか子（社会党委員長として発言、50代、黒スーツ、７Ｎ）•国民と共に歩まれた天皇陛下のありし日をしのび、私たちは歴史の教訓と戦後の初心に立って、人類の恒久平和のために努力する気持を新たにするものであります。

源ゆき（沖縄ひめゆり同窓会、70代、７Ｎ）•沖縄へご病気でいらっしゃれなかったものですから、大変、残念に思ってお亡くなりになったんじゃないかと思うんですね。私共としても、ぜひ一度、沖縄へいらして下さって、欲を言えば、ひめゆりの塔にもお参り下さっていれば、亡くなった乙女たちも喜ぶだろうと、考えています。

大阪・梅田で（20代、７Ｎ）•（大きいお腹に手を当て）この子は平成元年生まれになるなって、思ってたところなんです。

皇居周辺の路上で顔かくし、地面にうづくまりながら二人（20代、Ｇパン、７Ｎ）•なんで、押え

つけられなきゃ、ダメなんですか！（仮面かぶって歩いてた、の声）それで、何で、押えつけられなきゃ、ダメなんですか！

皇居前で〝ゴクミ〟イメージの少女（８Ｎ）•天皇陛下さまがッ、お亡くなりになってェ、自分の願いごとも、天皇陛下さまにかなうんじゃないかな、と思って…。

記帳にきた70代（皇居前、８Ｎ）•いろいろありましたからね。やっぱり、思い出されて。（涙声）

銀座で20代（８Ｎ）•個人的なことですけど、新しいお茶碗、買うかな、と思ったくらいで…。

渋谷の街角で20代（８Ｎ）•なんか、やっぱり、時代が変ったということで、いろいろ波瀾があってほしいと思うんです。

中国からの留学生（20代、８Ｎ）•昭和の時代、日本と中国の間で戦争がありましたね。今日から始まりました平成の時代は、日本と中国、世界は絶対、戦争なんかしないように。本当に、平和になるように、心から祈っています。

上坂冬子（作家、50代、座談会で発言、８Ｄ）•あの国際裁判で天皇が戦争犯罪人にならなかったことに不満なら、あの時点で連合国に対して日本人が何か行動を起こしたか、って問いたいですね。それもやらなかったし、それ以後、日本の国内で天皇の戦争責任をホントに真剣に問う動きがあったかどうか。最近、40年が経って、一人の人が亡くなっていく時にこういう格好で出てくるというのは、その前提自体がフェアでない、って気がして。今、起きている戦争責任論について、どうも私はなじめません。

高野悦子（岩波ホール支配人、50代、座談会に挿入されたＶＴＲで、８Ｄ）•まったく貧しい中から日本は豊かな国になったのに、芸術の面では、反対に衰弱していった。私たちは豊かになろうと一生懸命で、金権主義みたいになって、芸術という精神面を切り捨ててきたんじゃないか。これを何とかよい形にもっていって、次の世代にバトンタッチしていかなくては、と思っております。

テレビ東京

両日、19:00までと22:30以降はニュース。その間に記録映画等でつなぐ“かんづめ”番組が7日2、8日1、座談会各1、インタビュー8日1の編成。座談会出席者は7日の昭和回顧・くらしと経済の変遷で高原須美子が出た他は全員男性。インタビュー番組は女性アナが昭和元年生まれの人に聞くもので男性9、女性2、となっている。

原宿・竹下通りで３人連れの10代（７Ｎ）•ヘイセイ？　いやだ、いやです。昭和の方がいいね。ダサイな、平成はいやだ！

銀座で和服、毛皮のえりまき（50代、７Ｎ）•ちょっと淋しいですね。私たち昭和の生れですから。でも、あらためてね、ほら、新しい美智子さんも皇后さまになられますしね。期待しています。天皇さまもちょっとお早いという感じはしますけれど、それは、きりのないことですね。

赤坂でトレーナーの20代（７Ｎ）•（今日のテレビを）はじめは真面目にみていたんですけどね。ずっと同じだから…。これからビデオでも借りに行こうと思って。

橋本聖子（20代、７Ｎ）•何年か前、園遊会で声をかけていただきました。大変スポーツの、スケートの方にもよく知ってまして、これからもがんばるようにとお声をかけていただき、大変、印象に残っています。最初はでも、とても緊張してしまったんですけど。

花嫁（20代、結婚式直後の衣装、８Ｎ）•平成元年のはじめのこの記念すべき日に式をあげられ、とても幸せに思っております。

矢崎澄子（昭和元年生、保護司、黒ラメ、８日インタビュー番組＝８Ｉ）•亡くなったということを聞いた時には本当に一瞬が無のような何も頭の中にないような、ボーッとした気分でおります。私はともかく生まれた時から陛下でございますし、何をするにつけても常に何か、恐れ多いことですが、天皇陛下とご一緒だったと言っては申し訳ないですけど、常に天皇がいらっしゃって私があった、という感じでございます（中略）陛下が激動の中を暮したなどと書かれていますが、私自身も、女の一生として考えると激動の時代でした。

元起美津子（昭和元年生、保護司、緑柄和服・８

Ｉ）•あの、闘病が長かったですから。お年もお年ですから。がんばりなされて、まあ７日っていう日もいいし。えらい方だったなと思います。

黒柳徹子（黒ドレス、８日座談会に挿入のＶＴＲで）•（新天皇は）ほぼ私たちと同世代でいらっしゃるし、疎開もしていらっしゃるし、戦争ということもよくわかっていらっしゃるので、とても平和が大事だということを勿論亡くなった天皇もよく御存知でしたけど、もっともっと、あの、そこのところが難しいと思うんですけどもね。政治に関与してはいけないと思うんですけど。私たちは同世代ということで、一緒に何ていいますか、子ども時代に戦争を体験している世代であるということは、大変心強く思います。

フジテレビ

18:00スーパータイムに皇室報道が多くなっているこの局では、両日共、昭和天皇、新天皇の讃美に終始し、天皇批判、元号問題への疑問などの意見は皆無だった。７、８日ともニュースの後は露木茂の司会で座談会を編成。７日は中・高年の女優・歌手など10名、男性21名、司会に森光子が加わるなど、お昼のワイドショー的演出。８日の座談会は俵孝太郎、学友などの男性のみ。

黒柳徹子（50代、黒ドレス、７Ｎ）•あんなによくお笑いになる方とは思わなかった。

森下洋子（バレリーナ、40代、７Ｎ）•お優しいおじいさんという感じで、とても暖かいまなざしで、バレエの説明をきいて下さった。

原宿で10代の二人連れ（７Ｎ）•（平成の感想をきかれ）いいんじゃないですか。関係ないです㈑

街中の30代（５、６歳の男の子と一緒、７Ｎ）•平和でおだやかで、よさそうな元号だと思います。（ここで練習してみようか、とアナに言われ）男の子、マイクに向い大声で「ヘイセイ！」

東京駅の白人（10代、日本語で、７Ｎ）•日本だけのことでしょう。だから今日、皇居でサインしたいと思います。

橋本聖子（20代、７Ｎ）•陛下はスケートのことをよく知っていまして、これからも頑張るようにと声をかけていただいて、印象に残っています。

島津貴子（池田厚子と共にスタジオ出演、40代、黒ドレス、７Ｄ）•よく一緒に遊んでいただいたわね。鬼ごっこなどしました。

中学生の反応

中学１年社会科の冬休み課題として、社会に関するテレビ番組をみて、１分スピーチにまとめるよう指示した。１月７、８日の天皇報道を取り上げた生徒がクラスの半分近くになった。

肯定的なスピーチをまとめると、•死んだだけで時代が変わるので重要な人物•小さい頃から疎開していてかわいそう•若い時から即位して苦労している•戦後全国をまわって苦労している•外国を訪問した時、日本の旗が振られ、すごい力を持っていると思った•書類を書くのも楽じゃないと思った•研究や植物の好きな人•園遊会でひとりひとりに声をかけて優しい人•黙とうして泣いている人たちの姿をみて天皇はよい人だと思った•素晴しい人、神様みたいな人にみえた、などである。

一方、批判的な内容は•二日間も天皇番組ばかりでやりすぎだ•一つのチャンネルでやればいい•戦争を起こしたり、今では国の象徴なのにどうしてあんなに長くやるのか•亡くなったことはかわいそうだけど、戦争のことを思うとそうでもない•戦争を早く終らせれば、広島に原爆は落ちなかったかもしれない•沖縄の人たちの苦しみがわかった•戦争の残酷さがよくわかった•戦争のない国にして欲しい、など。

天皇制については「地理」の沖縄や広島の項で学習していたが、二日間の映像で生徒たちの見方がかなり変っているのに驚いた。体制側に歴史の歪曲、天皇の元首化の動きがあるが、残念ながら、今のテレビ、新聞の報道はそれに乗っている。情報化社会の今日、生徒たちに真実を見抜く力をしっかりつけさせなければと、痛感している。（東京　公立中学教員　吉永義春）

淡谷のり子（80代、黒いドレス、７Ｄ）•一番ご苦労なさった。お気の毒どころではないです。胸がいたみます。

吾妻徳穂（舞踊家、80代、黒、７Ｄ）•芸術院賞の時おことばをたまわりましてね。あーありがたい、って、私、オロオロしちゃって。涙が出ちゃってね。このあたり（胸に手）カッカしまして…。

宮城まり子（歌手、60代、黒、７Ｄ）•心の中にズンズン入ってくるような優しい言葉づかいでおっしゃって。私、一生懸命やりますって言いながら、おみ足が痛いのでは、と心配になりました。

松田トシ（元・歌のおばさん、70代、７Ｄ）•お心もちがあれだけのお声をワーンと出せるということは大変真正直な素晴しいご性格の方だと、敬服するばかりでございました。

山野愛子（美容家、80代、黒、Ｄ）•私は明治の女でございますから、今でも神様とばかり思っていますから、お顔をじっと拝顔できなかったです。

高峰三枝子（70代、香港から中継、７Ｄ）•とにかく優しい方で、尊敬申し上げているし、崩御になったということで、飛んで帰りたいのですが、切符がとれませんで、悲しいです。

バイニング夫人（80代、８Ｎ）•新しい天皇陛下は幼い頃から大変民主的な教育を受けられ、さまざまな経験を積んでこられました。

山形県の40代（８Ｎ）•（新天皇が特産の紅花をお見舞に持ち帰られたと聞き）今までは雲の上の人だと思っていた人が、私たちが作った花がおそばにあるんだなと思うと、近く感じられます。

福島県昭和村の60代（８Ｎ）•戦争がありまして、ずい分ご苦労なさったことと思います。私たちもその時代若かったことですけど、今になってみますと、あんなことありましたと思うから、なお…。

広島で花嫁（８Ｎ）•大変区切りがいいと申したらいけないんでしょうけど、同じように新たな気持でいけるというのが大変良かったかな。

皇居前で60代（８Ｎ）•私も大正の生れですからお互い苦労を供にし。そして日本の繁栄を天皇さまがご覧になって安らかにおねむりいただいたと思い、ご冥福を祈って記帳させていただいたんです。

出産後の母親（20代、８Ｎ）•（平成元年生れで）とても誇りに思っています。男の子がとても欲しかったので幸せいっぱいです。この子がいいものを運んできてくれるような気がします。幸せになろうね。（赤ん坊をみつめ、泣き出す）

テレビ朝日

スタジオ座談会「激動の昭和史」（７日19:15〜22:15）、「新天皇と開かれた皇室」（８日、18:45〜23:00）を中心に。それ以前は両日共ニュースの編成。７日22:15以降は「森繁の昭和史」。座談会のパネラーは８日の木元教子以外は全員男性で、大学教授（大江志及夫他）、評論家（西部邁他）、皇室ジャーナリスト（松崎敬弥他）など。

東京駅で70代（７Ｎ）•本当にお気毒ですね。長い闘病生活にも耐えられず、とうとうお亡くなりになって。心からお悔み申し上げます。

井上八千代（舞踊家元、80代、京都で、７Ｎ）•27年に芸術院賞をいただきました。それからちょくちょく賞をいただきますたびに、お目にかかりますので、大変、お優しい方と…。まことに残念なことやと思っております。

港区の愛育病院で出産後の母親（30代、７Ｎ）•なんか、ちょっと複雑な感じですが。天皇陛下がお亡くなりになって、その前に生まれたのが嬉しいのと、悲しみが同時にきちゃって…。こればっかは、お腹の赤ちゃんの都合もありますので。

広島で50代（７Ｎ）•この苦しみの３カ月が人間天皇だったと私は思いますが。やはり多くの人が死んだということを、もう一度、振り返っていただきたい。

黒柳徹子（50代、７Ｎ）•とてもよくお笑いになる方でした。園遊会で陛下が本、売れて良かったねとおっしゃると、まわりがどっとわいて…。

東京の10代（８日の座談会に挿入のＶＴＲで、８Ｄ）•同じ日本人なんだよという、そういう感じの、何ていうか日本人の象徴として、同じ人間として尊敬できる人に（新天皇は）なって欲しい。

木元教子（評論家、50代、８Ｄ）•我々は同年令でしたから非常に関心がありましてね、ご結婚に

関して。宮家のお嬢様がたの名前があがっていたのに、いきなり美智子さまがスパーッとお出になった時、やったぜ、という感触でした。(中略)美智子さんが皇室に入ったら、嫁姑の関係とかしきたりとかやお立場もあり、すげー、大変だろうなあという気がしましたね。(中略)自分がこういう生き方をしたいなあ、こういう生き方ができたらすてきだなあという思いがあって、それを具現化しているのが象徴天皇であり、天皇家であるというイメージがある。一方、めんめんと続いている天皇制というものに畏敬の念と侵してはならぬ面を感じ、この両者のバランスをとっているというのが今ではないかと思う。

座談会挿入のＶＴＲの中で20代（東京、８Ｄ）•天皇は象徴であって、国に関するものではないということ。その辺を悪用しないでほしい。

小学生の女の子（挿入ＶＴＲ、８Ｄ）•戦争をしないで欲しい。林や森など自然を残して欲しい。

20代（東京、挿入ＶＴＲ、８Ｄ）•われわれ国民を守って下さる、そういう方であれば良いんじゃないかなと思っています。

40代（東京、挿入ＶＴＲ、８Ｄ）•国の象徴で良いんじゃないですか。あまり政治に関与しない方が無難だと思いますが、あんまり期待もしておりません。我々平民といたしましては、ハイ。

日本テレビ

１月７日は６時から１時間ニュース、その後11時まで「昭和史と天皇」、８日は６時から１時間ニュースの後11時まで「新天皇陛下とこれからの皇室」、と２日間を長時間番組でまとめている。

この局の特徴として、古い記録フィルムやニュースフィルムを多量に使って時間的な経過をたどりながら、要所にＶＴＲでコメンテーターを登場させる、という手法が２日間ほとんど同じようにとられていたことがあげられるだろう。

７日ニュースから

広島原爆養護ホーム（60代、ベッドで）。今朝はショックで食事が喉を通りません。私まで悲しいです。

黒柳徹子•天皇陛下はおっしゃりたいことがたくさんあってお亡くなりになったことを残念に思います。

座談会から（出席　杉山雅央、小林完吾、沼田早苗）

沼田早苗（写真家）•昭和の偉大な天皇を撮れたか？ほんのちょっと、という気がしています。国技館においでになるところを、楽しんでいらっしゃる写真を撮りたいと思ってお待ちしていたのですが中止になってしまいました。（自分で撮った天皇の写真を見て涙にくれながら）

山口淑子（国会議員、黒スーツ）•私は日本人でもないし中国人でもないし、という自分の生き方がとてもつらくて、甘粕大尉の処に相談に行きまして、それで季香蘭を捨てる決心をしました。当時の季香蘭の人気は、私個人のものではなくて日本の流れの中の人気だったんです。（昭和史の証言者として時折絶句しながらコメント）

８日ニュース

日本テレビレポーター（20代）•記帳をすまされた方々はこの奥に思いを馳せながら祈りをささげていらっしゃいました。（皇居前広場で）

結婚式場で新婦（20代打ちかけ姿）•あたらしいということで思い出深い結婚式になりました。

病院で四つ子を生んだ母（20代）•やはり一歩のスタートというか元気に育ってほしいということだけですね。

晴れ着姿で成人式を終えた**長野市の女性**•中止にならなくてよかった。最初の日にお祝いが出来ておめでたいんじゃないですか。

新宿で森進一のショーが中止になった劇場前（70代、セーター姿）•そんなこと聞かないで、ナイショよ、遊びに来ちゃってそんなの答えられないわよ。

成田空港で（50代）•昭和の年号はほんとに複雑でしたからね。テレビで天皇のこと知っていやごくろうさまでしたと思いましたよ。

井田由美（キャスター）•週明けとともに街はいつもの通りに動くことになるでしょう。

座談会「新天皇を語る」（出席者　橋本明、藤本義一、加瀬俊一、酒井美意子、星野甲子久）他に

コメンテーターがＶＴＲで。

宮良ルリ（沖縄ひめゆり部隊生存者）いまでもまだもがき苦しんでいた友だちの声が聞こえます。

竹中敏子（新天皇の乳母　70代）•昼間は皇后さまが差しあげ、夜中の２時半には私がいつもお乳を差しあげました。椅子に坐って絹のふとんをしき、お顔のあたる部分に消毒ガーゼをあてまして、生れながらにして皇子さまというか、とびついて召上るということはありませんでした。

エリザベスバイニング夫人（新天皇の英語教師をつとめた、70代）•初対面の時の挨拶の言葉は決められていたのですが、御自分で考えて「チョコレートを有難う」と仰言いました。それで私は素直なお人柄の方で、これから仲良くなれると……

酒井美意子（鷹司和子さんと同級生）•先の陛下が御重体の時にあらためて国民にとって親のような存在でいらっしたことを確認しました。そういうことをふまえてますます国民に愛される存在になって頂きたいと存じております。

天皇を頂点とする家父長制の根強さ

鈴木みどり

――図書新聞「今月のテレビ」（1989・2・11）より転載――

百余日に及ぶ長い準備期間を経て、その日がついにやってきた。1月7日、昭和最後の日。テレビはこの日と翌8日の2日間、全局、周到に練り上げてあった特別編成に切り換え、一億総服喪の演出に精魂をかたむけた。すべてが予定通りの行動である。

さて、その中味はどうだったかといえば、これがまた、すべて、予想されていた通りの陳腐なメニュー。喪服に身を包んだ中・高年男性ばかりがやたらに目立つスタジオ座談会、ＶＴＲ取材による人間天皇を語るインタビュー、古いニュース・フィルムを寄せ集めて編集した昭和史回顧、ＶＴＲをつないでまとめた新天皇及びその家族の紹介……と、全局が判で押したように同じ番組様式、同じ内容という硬直ぶりである。事実、座談会やインタビューに登場する人物は、チャンネルを変えても、変えても、同じ顔ぶれ。中でも目立ったのが中曽根康弘、森繁久称、猪瀬直樹の三氏。リクルート問題では硬く口を閉ざしている中曽根前首相が、こういう時になると急に元気づき、忠臣ぶりをアピールするあたり、さすがというか、恐れ入る。

ともあれ、こんな番組を延々と流していては、数時間もすれば、画面の前におとなしく坐っている人の数は激減するだろうと予測したが、実際、その通りになった。レンタルビデオ店が繁盛し、視聴率は各局、軒並みダウン。さらに、抗議の電話が全国のテレビ局へ殺到したことは、数日後の新聞各紙が報じた通りである。

この積極的な視聴者の意志表示には、局側も相当あわてたとみえ、7日夜に入ると、街頭インタビュー等による人びとの声・反応の中に、少しずつだが批判的な色彩も加えるようになった。例えば、ＴＢＳはヒロシマ詩人・栗原貞子にマイクを向け「天皇の心の中には、ずっと戦争肯定が生き続けていたと思う。私にとっては、第二の敗戦を迎えたという感じだ」という発言を、沖縄のひめゆり同窓会、長崎市民の声などに共に伝えていた。

なお、二日にわたり天皇報道に明け暮れたマスコミは、期せずして、この国には今なお天皇を頂点とする家父長制が堅固に存在することを人びとに再認識させた。特にテレビは、女性の従属性を強く印象づけた一連の儀式、あるいは女性の参加の余地がほとんどなく構成されていた番組群にみるように、この事実を視覚的な映像で誰の目にも明らかなものとして提示したから、テレビの前の女性たちは、平等への道のりの遠さを、改めて思い知らされた。

もっとも、振り返ってみると、テレビは年末年始にかけて11本にものぼる大型時代劇を放映して、弱肉強食の論理によって生きる男たちを肯定し、彼らが支配する社会のあり方を、天皇の死に先がけて検証する作業にとりかかっていた。この種の隠されたメッセージに敏感になることから始めない限り、天皇を民主主義社会の「象徴」に変えていくことは難しい。

■特集1

考えるきっかけになった2日間

G・オルソンさんに聞く

ジョージ・オルソンさんは滞日39年、ＦＣＴの創設メンバーとして重要な役割を果たしてこられた。ルーテル派教会の牧師さんとして、またルーテルマスメディア研究所長として多忙な毎日を過して居られる。九段の靖国神社と通りを隔てた向い側のビルにある事務所で、「私が経験したＸデー」について、以下のようなお話をうかがった。

――１月７日はテレビをどのように見ましたか。

Ｇ・オルソン（以下Ｏと略）１月５日から７日まで伊豆の天城山荘でセミナーがありまして、それが「昭和時代とＸデーと将来」というテーマなんです。宣教師を中心とした人たちの研究会で、わたくしも参加していました。日本人も少しはいましたが、ドイツ、スイス、カナダなど様々な国から70人位集っていたんです。

６日の夜は12時近くまで天皇の戦争責任の話をしていました。天皇とマッカーサーの会見は和解の場であったと思うので、わたしにとっては、問題は解決した、日本とアメリカの間にしこりは残っていないと感じています。しかし、英国やオランダ、韓国といった国から来ている人たちは､「日本はまだおわびをしていない、と。ドイツの人はドイツはあやまったのに、日本はあやまっていない、と言っていました。日本は言葉ではなく心で表す国ですし、西洋は言葉がほしい、そのあたりが少しくい違っていると思いました。

そんな話をしたあと寝て、６時に起きてシャワーをあび、テレビをつけたらキトクと告げていました。７時15分から30分間祈りの時間がありまして、日本のためにみんなで祈りました。そして８時の朝食の直前に亡くなったと知りました。

――それからどうされましたか。

Ｏ　すぐに東京の家内に電話をかけてとりあえずＮＨＫテレビの６時間のビデオ撮りを頼み、夕方には東京へ帰ってきました。

――テレビについてはどんな感想を？

Ｏ　わたくしは９月に天皇が発病された頃の報道について、民主主義のきけんを感じました。でもその後時間があって自粛ムードになったことから、放送局も新聞もかえって少し自由になったのではないでしょうか。Ｘデーについて言えば、わたしの友だちはあの日から教育テレビが大好きになった、と言っていました。ともかく、日本人は忙しすぎると思いますから、考えるヒマがないんですね。そういう意味で、あの２日間のテレビは日本人にいろいろなことを考えさせるきっかけにはなったのではないでしょうか。

――大喪のテレビ中継については……

Ｏ　午前中は丸の内ホテルで祈りの会に出席し、午後からテレビを見ました。儀式そのものは非常に日本的ですね。宗教と政治との関係がずいぶん問題になりましたが、ともかく信じなくてもいい権利を認めなくてはいけないと思います。社会党の土井たか子さんは、国の行事にだけ途中から出席していました。ああいう自由を守るのは大切なことです。ＦＣＴが３周年を迎えた時に、奥平康弘先生が「大きな流れに抗して」という講演をされました。日本全国民が大きな流れにまきこまれてしまうことはとてもこわいことです。わたくしは共産党ではないけれども、このたびの社、共の党の人たちは流れに抗したと思います。今度のことに限らず、市民団体が流れに抗する役割を果たさなければならないことは、テレビの問題もそうですし、ほかにもたくさんあるでしょう。

右翼が静かになった

オルソンさんは天皇について報じられた英字新聞、雑誌の天皇特集号、新聞の切り抜きなどを大きな袋にぎっしりとつめこんで集められていた。

この問題について書かれた英文の原稿も出来上ったばかりなので、話しだしたらとまらない、という位、思うこと、考えていることがある様子だ。

Ｏ　９月19日から３月10日位まで靖国神社はとっ

ても静かで、この附近の人たちは大助かりだったんです。でもまた元通り、右翼の人たちが1日中このあたりで騒ぐもので、とても迷惑しています。

ずっと自粛していてくれると助かるんですけれど……とくに日教組の大会の頃はここから出発していくらしくて、まあひどいものです。

右翼といえば、1月31日のテレビ朝日「朝まで生テレビ」に出た右翼の人はなかなかいいことを発言していました。テレビ局が話す場を提供し、公に話しあいをしたわけです。右翼でも左翼でもいいからとにかく出て来て話しあいをするというのはとてもいいことだと思います。

――外国の論調についてはいかがですか。

O　ジャパンタイムスなどには天皇の戦争責任についてかなりはっきりした書き方をしていました。

オランダや中国でも、この機会に日本の天皇についてあらためて責任を問うという書き方もありました。でも一方では讃美した記事もあり、わたしの見たところではフェアだと思いました。英字の読売新聞など思いがけずはっきりした意見ものせていました。

オルソンさんは65歳、来年は定年を迎えるが、「いのちの電話」を主催する奥さまと共に日米間を年に何度かは往復して、日米関係、アジア太平洋の関係に橋をかける仕事を続けたい「それがわたしの生き甲斐」と話された。（まとめ　竹内）

●開戦の重要な責任者としての天皇

G・マルシャンさんに聞く

総武線小岩駅から徒歩7分程のところにある小岩カトリック教会の神父で、幼稚園の園長先生でもある、ジョフロア・マルシャンさん（FCT会員）はフランス国籍で、18年間日本に滞在されている。

――1月7日はどんな番組をご覧になりましたか。

マルシャン　テレビ朝日の夜の番組で、座談会を見ました。様々な立場の人が登場し、天皇の責任問題などを話していました。私は翌日の説教の原稿の用意をしていたのですが、思わず聞き入ってしまう程面白かったです。天皇の責任問題は長崎市長の発言など様々な意見があることは、新聞を見て知っていました。この番組は昭和をふり返って議論が進んでいたので、大変勉強になった。そして天皇に責任があるとは簡単に言えないことが理解できた。

――あの日のテレビを見て、きわめて日本的だなと思われたことは

M　どのチャンネルを回してみても、喪服を着て天皇懐古の映像が放映されていた。亡き天皇の思い出といったアルバムをめくるような番組には興味がなかった。どのチャンネルでも天皇特集が組まれるのは、地域で葬式があった場合、気持を表わすためではなく、義理で町内の人がみんな参列するのと同じようなことと思われた。だからどのテレビ局でも喪服を着ないと悪いのではないかと、そんな判断をしたのだと思う。

――日本で暮らしてみて、日本人の集団所属意識を感じることは

M　私の経営する幼稚園で、2年前に制服をなくすことを提案したら父母の方から不安や心配の声があがった。きっと制服があると、どこかのグループに所属していることに安心し、けじめがあるように感じられるのでしょう。制服を廃止した今はそんな不安の声は聞いていません。

――1月10日から幼稚園が始まったそうですが、その時の様子は

M　宗教法人で認可された幼稚園なのですが、江戸川区から弔旗を掲揚すること、黙禱すること、歌舞音曲を控えることと速達で通達がきました。そして電話もありました。先生たちは、国旗について説明をすることはあったようですが園ではそれ以上の事は何もしていません。

――天皇報道についてはどういうことが目につきましたか。

M　フランスの新聞ル・モンドを読みましたら、戦争勃発の時天皇は3㎏もある、金で出来た印鑑を押したと書いてありました。印鑑が重いから責

任があるというわけではないのですが、開戦の重要な責任者といえますね。もしその戦争が間違っていたのなら発言すべきです。その新聞には天皇の教育についても詳しく書かれていました。

――幼稚園でテレビは問題になりますか。

M　園児たちの言葉づかいや動作にテレビの影響をみることはよくあります。恐らく１日中つけっぱなしの家庭もあるんじゃないでしょうか。けじめのある教育を要求しながら、家庭ではルーズな生活が伺える。そしてそれは幼稚園では直せないのです。美しいものをたくさん見せること。様々な体験を積み重ねるといった、バランスのとれた生活をしていないと子どもは何が正しか判断できません。

ずっと以前、新聞の投書欄に、ある番組の太ったイエスキリストが水を頭からぶっかける懺悔のシーンを批判した教会関係者がいました。私は力で規則するのはよくないと思いました。ですから投書した人には賛成いたしません。つまらなければスイッチを切る。自由な社会である限りしょうがないのです。

何が良いか悪いか、自分の判断で決めることが大切です。その意味からいっても、ＦＣＴのやっているメディア教育の大切さをつくづく感じます。フランスの言葉にもありますが、国民のリーダーは国民が選ぶもの。テレビについても同じことがいえるのだと思います。（まとめ　永田）

●我が家の天皇問題

鈴木昭子

昨年９月19日夜11時すぎ大学生で、築地の新聞社でアルバイトをしている息子が皇室の変事を知り、電話で知らせてきたのだった。我が家は新聞社の出先機関、通信局である。所属は社会部だが、本社や県庁所在地にある支局と違って局長１人で、あと家族全員で協力し合っていかねばならない。よほどの大きな事件以外、その街の政治、文化、事件、全てを受けもち写真から原稿書き、現像から送稿まで何役もこなす。

息子からの知らせにより、夫は支局に電話して今後の連絡網などの対策について問い合わせているうちに夜はふけていった。翌朝万一に備えて、支局から県下全員への連絡網がＦＡＸで送られてきた。受け持ち管内にて、Ｘデーの知らせが入った時にすぐ取材できる態勢でいるために、禁足令が出された形となった。仲間の記者たちの間でも結婚式参列を断念したり、休日も出歩けないとあって、だんだんストレスが高まっていった。そんな中で11月も下旬から、局舎の前で夕方５時から10時まで、警察官が２名ずつ毎日交替で車での張りこみが始まった。このような折でもあって、赤報隊襲撃事件を警戒しての処置のようだった。

２、３日は気にならなかったが、寒い日が続き９時頃熱いコーヒーをもてなしたのをきっかけに、以後２月末までこの接待は続いた。悪いことをしているわけでもないのに毎日見すえられているのは、良い気分ではない。でもそんな中で若い警察官が、非番の日に夜の街で職質されたとか。デートに行って車から離れたすきに愛車のホイルやカーステレオまでも盗まれたという、笑うに笑えぬエピソードもこのような機会がなければ聞けなかったことである。

各地で記帳ブームがすっかり定着したころのことである。一市民（革新系ではない）から、記帳所撤廃要望と続いて監査請求が出され、穏やかな街に一石を投じた。全国的にも珍しいこととして、夫の記事は県版ではなく全国紙にのった。

何度か陛下の御病状に危機があり、みんなが血圧や体温の見識者になっていった。暮れも近づいた頃、例の市民から予測されるご大喪の時について、公的機関がその折弔旗や記帳所を出して、哀悼の意を表すのはおかしいという意見書が市長あてに出されたことを知った夫が、再びそれを記事に取り上げた。読者の反応はすさまじいものであった。「Ａ紙の記者ともあろう者がなぜあのような記事をのせたのか。もっと他に紙面を使うことがあるはずだ。」「のせる前に良識で判断できなかったのか。」電話が続いた。不思議に賛同する電話は皆無であった。それに対し夫の答えは、

「記者の考えでのせたりのせなかったりすることは好ましくない。いろいろな考えの人がいるという事実をのせ、それぞれの読者の判断に任せるのも新聞の使命なのだ」だった。

そしてあの日、１月７日未明１本の電話で起こされた。今は政治部天皇班になっている息子からだった。「今、会社から呼び出しがきた。これから出社する。」口早に言って切れた。それから数分たって、かねてからの連絡網で「陛下悪し」の報が伝わってきた。

それからが長い１日の始まりだった。

■特集2――地方からテレビを考える(1)

アクセス―京都での一つの実験

立命館大学　松田　浩

最近の天皇報道ほど、マスメディアの国民からの遊離、その落差の大きさを痛感させたものはない。この現状をどう変えていったらいいのか―ここでは京都で、ささやかに取り組まれている「マスメディア共同利用実行委員会」の実験について報告してみたい。

私たち京都の視聴者たちは地元、ＫＢＳ京都（近畿放送）の労組と手を組んで「マスメディア共同利用実行委員会」（加盟＝市民団体、中小企業団体、労働団体、計40団体とほかに学者、文化人）という組織を発足させ、自主企画のレギュラー番組「ポーポロ京都」（30分）を昨年８－９月、８回にわたって放送した。「ポーポロ京都」の〝ポーポロ〟とは、イタリア語で〝民衆の〟〝市民の〟といったほどの意味である。つまり「ポーポロ京都」は市民自らが金を出しあって企画・放送したアクセス番組なのである。

呼びかけ人には、茂山千五郎（狂言師）、高石てつや（フォーク歌手）、池上惇（京大教授）、松尾博文（立命大教授）、「市民のためのＫＢＳをめざす実行委員会」代表）など文化人、学者が名を連ねた。「ひとり一秒、1,000円。みんなでつくって、見るテレビ」をキャッチ・フレーズに一口千円で市民に募金を訴え、結局、実行委員会に参加した団体や個人のカンパ、賛同スポンサーのＣＭ料などで1,085万円の番組制作・放映費用をすべてまかなうことが出来た。

番組の企画から資金集めまで実行部隊には、機関紙協会、京都教職員組合、全京都企業連合会、ＫＢＳ近畿放送労組など18の幹事団体が中心となり、番組企画委員会の中には番組の①消費税を考えるコーナー②特集コーナー③ウィークリー・コーナーに対応してワーキング・グループが設けられた。番組は「上方芸能」編集長で立命大教授でもある木津川計氏をキャスターに毎回ゲストを迎え、ニュースワイド形式で進められた。

はじめてのことで30分のなかに話題を詰め込み過ぎたり、印象が固かったりで、あとになってみれば反省点は多い。が、半面、市民手づくりのアクセス番組ならではの問題提起や話題提供、切り口の新鮮さなどおおむね好感をもって一般視聴者には受けとめられた。市民が力を合わせれば、自らスポンサーになって、市民サイドの情報を提供したり、問題提起することができることを実証してみせた意義は、とりわけ大きかったと思う。日ごろ、単なる受け手としてマスメディアやその送り内容に対して受け身の存在だった市民団体や労働組合が、マスコミに積極的な関心を持ちはじめたことも、見落とせない変化といえる。なにより、これらの団体の間に、今後のアクセス運動のための組織的な基盤ができたことは重要だ。

実行委員会では、次の共同事業に向けて、いまいくつかの構想をあたためている。そのなかにはＮＨＫ、民放の番組審議会に市民の代表を推薦して送りこむ運動やＣＡＴＶ「洛西ケーブルビジョン」を使っての自主制作番組の放映、新聞・雑誌を通じてのアクセスの可能性なども研究課題としてあがっている。第一回は消費税が中心テーマだったが、今後は京都の街づくりなど文化的な問題にも目を向けていく考えだ。

ところで、この「ポーポロ京都」の経験は、どこまで一般性を持ちうるだろうか。というのは、ここには京都だけが持つ特殊な条件の存在も見落とせないからだ。第一に、ＫＢＳ京都という広域電力圏のなかの弱小ＵＨＦ独立局だからこそ、1,000万円程度の募金の範囲内で番組の自主企画・提供ができたという事情がある。しかし、この点は、他の地域でもラジオやＣＡＴＶを使えば決して実現不可能ではあるまい。

第二に、ＫＢＳ京都労組の果たした役割がかなり決定的だ。同労組は、早くから地域に根ざした放送活動、開かれた放送局づくりに力を入れ、

1981年には会社との間できわめて進んだ「覚え書き」、一種の〝編集綱領〟的文書（「放送の基本方針」）をとりかわしている。

その〝基本方針〟は次のようにアクセス権を明確に認めている。

＜3. ＫＢＳ京都は、…地域に開かれた放送局としての使命を果たすべく、市民との連携と交流を深めるとともに、アクセス権を認容し、その必要な措置をとることにより、視聴者の権利と市民生活を守る機能を発揮しなければならない＞

第三に、同労組では、この基本方針を足場に1985年には地域の市民団体、学者、文化人、労働団体とともに「市民のためのＫＢＳをめざす実行委員会」「代表= 松尾博文・立命大教授）を作り、これらの団体や市民のカンパをもとにして異色のアクセス番組を企画、放送する実践を積み重ねてきているのである。

京都生協がスポンサーになって平和問題や食品添加物、食糧問題、地域と子ども、文化の問題などを取り上げた「輪っとハッピー」、京都府教職員組合を中心とした市民団体「教育を考える京都フォーラム」がカンパを集めて放送した「高石ともやの学校キャラバン」、京都府保険医協会などが企画提供した「小南陵の医療みてある記」、さらに〝コーヒー２杯分、みんなのカンパで〟と市民からの募金で実現した「国鉄解体に反対するＣＭ」の放映運動などがそれだ。

「マスメディア共同利用実行委員会」の設立とその事業第一号「ポーポロ京都」の放送は、こうした運動の積み重ねのうえに実を結んだのであった。それはさらにさかのぼれば、かつて蟻川革新府政を支えた京都の民主主義勢力の力量や学者、文化人を含めた広範な統一戦線の存在、京都という街が持つ革新的な土壌などとも切りはなしがたく結び付いている。

その意味では、「ポーポロ京都」の実験は、京都の特殊な条件下での、それもＫＢＳ京都という弱小の広域ＵＨＦ局だからこそ実現可能だった例外的事例と片付けられなくもない。しかし、日本でのメディア・アクセス運動を考える場合、そこから汲みとるべき教訓もまた決して少なくないのではないかと。その第一は、市民サイドのアクセス運動とメディア内部の労働組合運動との連帯の重要性である。とりわけ日本の場合、歴史的にみてもマスコミ労働者が果たすべき役割が大きい。

今回の「ポーポロ京都」のケースでも、ＫＢＳ京都労組の地域密着の地道な実践と闘いの結果としての〝アクセス権認容〟の労使覚え書きがあって、はじめて実現可能になったのであり、「市民のためのＫＢＳをめざす実行委員会」の運動の積み重ねのなかで、それを可能とする主体的な条件と力量が培われてきたのであった。

「ポーポロ京都」の取り組みを通じて「やってみて、本当に自分たちが放送メディアを使って発言したり、知りたいニュースを伝えたりすることが可能なのだということが実感できた」という感想が多くの市民団体や労組関係者から寄せられていることは、運動のなかでの人々の意識の変化を如実に物語っている。そしてこのことはメディア内部で働く労働者、ジャーナリストについても同様であろう。

市民内部の情報ネットワークをどう広く組織していくか、さまざまな市民団体に運動をどう広げていくか、企画・制作の力量をどう高めていくかなど、今後に残された課題は多い。しかし、大事なことは、市民自らが地域で抱えている問題を堀り起こし、市民相互の討論を通して解決の道を見い出していくという地域住民運動の原点を大切にしながら、与えられた条件を最大限に生かし、創意を発揮してマスメディアに市民の発言の場を広げ、その声を反映させていくことであろう。

「市民がマスメディアを積極的に利用し、その『主人公』となり、市民のための情報ネットワークをつくっていく」（結成宣言）という「マスメディア共同実行委員会」の活動は、同時にマスメディアの果たす役割やそのあり方に市民が目を向け、マスメディアそのものを市民のメディアとして作りかえていく運動に必ずつながっていくに違いないと、私は確信している。

FCT データ・バンク

―国内篇―

●天皇をめぐる開かれた論議、 図書新聞編、洋泉社、1989年2月。

大いなる曖昧さと秘密主義はこの国が現在まで生き続けてきた重要な思考の形である。新しい日本がこの曖昧さを排除するために開かれた論議を大いに盛りあげて、一つの転機としよう、という意図をもって天皇についてさまざまな角度から3、40代の戦後世代が論じている。

昭和64年1月7日（桶谷秀昭）、文化としての天皇政治（松本健一）、情報資本主義を取り込む天皇制（園田恵子）、準備されていた過剰報道（門奈直樹）、天皇報道とコピーの氾濫（鈴木みどり）、歌会始とは何だろうか？（内野光子）、ひととして死ぬのでなく…（小阪修平）、天皇はジョーカーのような切り札（筏丸けいこ）、たいした意味がない天皇制（小林広一）、天皇とは何とも苦手なテーマ（菊田均）、自粛現象が有機体を目覚めさせた（芹沢俊介）、ピラミッドイメージの天皇制（桂秀実）、天皇が背広を着た時（川村湊）、歴史のパフォーマンスとしての病と死（山折哲雄、藤井貞和対談）、象徴天皇制の曖昧さ他（柏木博）、昭和という物語他（三上治）、疾駆する知あるいは「黄色い孤の王」へ（山本ひろ子）、見つめてはならない天皇の写真（桐山襲）、非国民のすすめ（菅孝行）、短歌と天皇制の繋がり（道浦母都子）及び資料として「元号の歴史」「皇位継承と葬儀に関する皇室の儀式、天皇を知るための本、など所掲。（T）

●特集・「天皇」とマスコミ、「マスコミ市民」№248～250、1989年4月。

永久保存版としてまとめられた全480頁の特集号。

≪「昭和の終わり」と私―大報道に見たもの・考えたこと≫で稲葉三千男、清水英夫をはじめ140名にのぼるマスコミ研究者、市民活動家が寄稿。さらに≪その時、報道現場の記者たちは…≫として、新聞、テレビ、ジャーナリスト17名がXデー当日の行動をドキュメント報告。

また、次の9論文も収録されている。戦争責任の問題―64年間をふり返って（久野収）、新天皇は憲法を守れるのか（弓削達）、新聞はどう報道したのか（新井直之）、「売らんかな」の雑誌を検証する（茶本繁正）、黒枠の中のブラウン管（青木貞伸）、天皇死去報道の思想（門奈直樹）、「昭和天皇制」の戦前と戦後（山川暁夫）、呪縛からの脱却（牧港篤三）、「現代天皇制」の再点検（南方紀洋）。

なお、これだけ多くの人びとが執筆している中、女性の執筆者が7人というのは、今日のマスコミ状況を象徴しているというか、驚きである。

どの発言も2日間の天皇報道を厳しく糾弾している。これだけの意見が昨年9月19日以降、Xデー以前に噴出していれば、事態は少しは変っていたのではないかというのが、続み通しての卒直な感想。（M）

●「取り込まれる」ジャーナリスト、天野勝文「総合ジャーナリズム研究」№128、1989年春季号。

この度の「元号に関する懇談会」メンバーの顔ぶれをみると、8人の半数が新聞、放送界から、しかもトップの人たちで、政府に取り込まれるジャーナリストの現状を象徴していた。総務庁編「審議会総覧」をみると、現職のマスコミ関係者が政府の審議会212のうち100に委員としてかかわっている。その数はOBを含めると156にもなる。特に多いのはNHKと日経新聞関係者だが、朝日、読売、毎日の関係者も多い。さらに各種の私的審議会となると、その数は大変なものになるだろう。

日本では政府審議会委員になるのを〝勲章〟と思い、各種のサービスを受けられるメリットをむしろ歓迎するジャーナリストが多い。この誤った公共サービス意識と比べると、アメリカのメディア、例えばワシントン・ポストの倫理規定の厳しは特筆すべきである。

しかも、今日では、リクルートに代表されるように、企業側の総合情報産業化が進み、ジャーナリストたちは企業側からも取り込まれつつある。彼らが政府や企業側の〝情報流通業者〟になり下る危険性が大きい今、ジャーナリズムの明日は暗い。

なお、同誌はこの天野論文を含む5本の論文を並べ、特集・「天皇報道」の研究、を組んでいる。（M）

●大いなる昭和―いつか昭和を語るための永久保存版、文藝春秋特別号、1989年3月。

主な内容――象徴天皇の宿命（福田恆存）、戦争責任とは何か（林健太郎）、立憲君主の鑑（E・ライシャワー）、天皇ショック世界を走る（外国人記者座談会）、激論・愛憎の中の昭和天皇（テレビ朝日・朝まで生テレビ収録）、徹底討論「開かれた皇室とは何か、昭和天皇87年の軌跡（半藤一利）、天皇皇后から皇太子への手紙、天皇その無用の大用（高坂正堯）、天皇自身による天皇論（鎌田伸一）、天皇・マッカーサー会見の真実（フォービアン・バワーズ）、遠い国から見た「皇帝の死」（倉田保雄）、イギリス・天皇パッシングの背景（古森義久）、天皇制論争の終焉（西義之）悲史の帝（葦津珍彦）他。（A）

●目のとりこ―みることへの―極集中は不安、知覚のバランスくずす恐れ、吉田秀和「朝日新聞」1989年3月22日夕刊。

「みることは知ることに極めて近い。だが同じではない。場合によってはかえって知覚としてはバランスのこわれたもの、つまりは誤認の基になりかねない。TVの存在が私たちの世界と生

活の認識に大いに役立っていることは否定するものではない。

それは私たちの日常の認識と感覚に深く食いこんでいる。特に、どういうわけか日本では際立ってそうなのである。早い話が、この間日本中のＴＶが二日間ある一つのテーマをめぐる番組で塗りつぶされかけたあと「みるものがなくて」という非難がマスコミでさかんにとりあげられていた。あれはいろんな思惑がからんだ現象だったろうが、とにかく二日間ＴＶがみられなかったというのがあんな騒ぎになりうるところに今の日本のＴＶ漬けの日常生活が正確に浮きぼりされていた」およそみることにつながる手段はどんどん精妙化し、拡充するのだが、それにつれてほかの器官による接触は遮断されることが多い、として、１月７、８日のテレビをきっかけに見ることへの傾斜が強化される一方の文化につい「日本の知性」ともいえる吉田氏は憂えている。（Ｔ）

●同時代を撃つ―情報ウオッチング、立花隆、講談社、1989年３月。

ジャーナリストの重要な役割は時代を批判することである。当代随一の厳しい、鋭い目をもった著者がリクルート疑惑について、都市問題について、オリンピックについて等々、報道された事実のウラにひそんでいるものを読みとる作業を続けている。例えば、税制改革や原発の安全性について政府が億単位のお金をかけて政府広報を出している事実は、政府が税金を使ってその見解を国民におしつけているのであって、それを掲げるメディア側の問題もあわせてとても民主的とは言えない、とのべている。何かおかしい、どこかおかしいと思うことが多い新聞報道の読みとり方を知る上でも、ぜひ一読をすすめたい。同名の書のパート２として出版されたもの。（Ｔ）

●異文化間のコミニュケーション、中津燎子、「ウイ」1989年２,３月号。

「文化」とは人間の生き方のパターンであり「異文化」とは自分とは異なる生き方のパターンをもつ文化である。例えば日本人は妥協的で同化しやすく、順応型、アメリカ人は主張型で対立的、順応型の人間に対しては疑問をもってしまうタイプ、そして疑問が解明できなければ納得しない、という特性をもっている。こうした異った文化は違った形の言語や伝達方法をもっており、例えばアメリカでは言葉が存在しない伝達方法はありえない。日本語は言葉よりも感性を重要視する，黙っていても察してくれる，日本語の世界は他にほとんど例がない。それ故に、言語を学ぶ時にはまず生き方のパターン原型を理解しなければ、日本と外国人の間の理解は成り立ちにくい。とくに「帰国子女」の問題を考えると、二つのパターンの違いからおこる摩擦と衝突が原因と思われるものが多い。両親や教師が客観的にパターンの違いを認識することがまず大切なことだ、と述べている。著者は英語教育について多くの著書や発言をもつ塾主宰者である。（Ａ）

●いまどきの子ども、パート１、子どもとニューメディア、女子社会教育会、1989年２月刊。

家庭教育セミナーの一環として行われた講座の内容を中心に、それぞれの講師が加筆・執筆してまとめたもの。「青春している子どもが見えますか」情報アナリスト柴山順子は、中、高校生を相手にしたおしゃべり電話にかかってくる子どもたちの声を情報素材としてマーケティングにいかす仕事を通して、子どもの自己確認への手助けをしている、としている。「いきいき子どもはどこに」児童精神科医甘楽昌子は、活動的でエネルギッシュな子どもを好ましいと思いつつ従順で手がかからない子を「いい子」としてしまう教育現場の矛盾を語り、大人と同じメディアに接し、それが遊びの大部分を占めている子どもの現状をもつと真剣に考えてほしい、としている。「商品になっている子ども」はＦＣＴの鈴木みどりが、テレビＣＭがいかに子どもを多く扱い、子どもに向けて作られているか、子どもたちの「心」をも商品化させてしまっている状況を解説し、子どものメディア教育の必要性をのべている。「ニューメディアと子ども」は流通経済大学教授高村久夫が、テレビゲームをはじめとする新しいメディアが子どもの人間形成にどう関わっているか、遊び、学習、生活との関連ずけの中で考えていかなくてはいけない、と昨今の子どもの状況をふまえて提起している。（Ｔ）

●テレビとファミコン―ちいさいなかま・保育の本、全国保育団体連絡会編、草土文化社、1989年１月刊。

1971年創刊の月刊保育誌「ちいさいなかま」が89年２月までの計229冊に掲載してきた保育実践記録、手記・論文、記事などをテーマ別に整理、選択、再構成して新たに全37巻からなる「保育の本」シリーズを刊行した。本書はその１巻。

テレビとのつきあい方、〝テレビ〟にものを言おう、テレビもんだい、もう一歩つっこんで、の３章に分けアンケート調査への回答、実践記録、実態調査報告などを収録。ＦＣＴのＣＭ分析、ホームドラマ分析に関する報告も入っている。（Ｍ）

●子どもとテレビについて考えたことありますか……？「月刊音楽広場」1989年１月号、クレヨンハウス。

シリーズ・子どもが危ない「おやつ」に続くテーマが「テレビ」。ＦＣＴの鈴木みどりの話しを中心に組まれている。

テレビの影響は大人にとっても大きいものがあるが、より柔軟で、直接刺激を受けやすい子どもにとっては注意を要する。日本の２つの島の例を引きながらテレビと子どもの生

活の変容について触れている。奄美大島ではＮＨＫ総合と教育だけの受信が10年間続き、76年に民放２局が開設されると、子どもの遊びが、海で泳ぐなどからプロレスごっこなどへと変化した。もう一つの例は民放番組のビデオテープを２～３週間後にケーブルテレビで楽しんでいた小笠原諸島。84年放送衛星によってＮＨＫの電波が届くようになると、プロレスごっこなどの遊びが減り、音楽の好みにも変化が見られた。

テレビとの対応の仕方を、見せ方しつけの問題にするのではなく、より積極的にテレビに向きあい、テレビ産業のしくみを知り、テレビに発言したり、投書するなどのリアクションを勧める。他にアメリカの市民団体ＡＣＴの新しいパンフレットの紹介もある。（Ｊ）

●テレビ・ラジオ視聴の現状―昭和63年11月全国視聴率調査の結果から、「ＮＨＫ放送研究と調査」、1989年２月号。

ＮＨＫが昨年（88年）11月14日から20日の一週間に全国７歳以上の個人を対象に日記式記入方法で実施した視聴率調査の結果。

１日平均テレビ視聴時間は全体では前年と同じ３時18分（うちＮＨＫ１時間６分、民放２時間12分で、ＮＨＫの視聴時間が前年より６分減少）。性別・年齢層別でみると、視聴時間がもっとも長いのは60代以上男性で５時41分、同女性５時25分。もっとも短かいのは13～19歳女性２時間８分、７～12歳女男２時間15分。男女共ほぼ年齢が高くなるにつれ視聴時間が長くなる。

ＮＨＫを見る時間も７～19歳は男女共12～18分、20代男性20分、同女性28分、30代男性39分、同女性46分と、年齢が高くなるにつれ多くなり、若年層のＮＨＫ離れが前年同様、著しいことがわかる。（Ｍ）

●若者とメディア６・ＣＶＳに群がる若者たち、香取淳子、「放送レポート」№97、1989年３月号。

ＣＶＳとはセブン・イレブンに代表されるコンビニエンス・ストアのこと。それが都市に生きる若者の今日的メディアであり、ほぼ唯一の人間らしい空間になりつつある、と捉えて「若者」論、あるいはメディア論を展開する。

24時間営業のＣＶＳでは店員をほとんどアルバイトの若者でまかなっている。売り手も買い手も若者であることでＣＶＳは仲間意識のもてる店としてものを売るだけでなく、情報を売り、居心地の良さを売り、そこに若者が群がってくることで、情報発信機能を持つまでになっている。

なお、筆者がＣＶＳに注目するのはその店舗数、年間売上高が急速に延びているという事実による。それを示す朝日、日経掲載のデータを示しつつ、データの背後にある社会現象を若者との関係で読み解く時、ＣＶＳの存在価値は利便性であるよりむしろ閉鎖的空間が与える心の安ぎにあると、という結論に到達した、ということのようだ。

何気なく見過している調査データを読み直し、若者の風俗・文化の形成に深くかかわるメディアの様能を考えてみようとする姿勢は本シリーズの１回目「怒れる若者はどこへ行った」（88.5）でロックミュージックを取り上げて以来、一貫している。以来、車、スポーツ、ファッションなどの〝若者メディア〟と精力的に取り組んでいる。（Ｍ）

●働く女性の子育て論、田中喜美子、新潮選書、1988年11月刊。

なにかといえば批判的に語られる母親、しかし母親の側からの発言は少く、いつも「いわれる」立場に身を置いているのも実情だ。社会状況がこれほど変化しているのに、母親像だけはいつまでも昔のままのおふくろ的存在を理想として語られている。就業する母親がこんなに増えている現代の、現実的な子育て論、母親論を、多くの資料をもとにしてまとめたのが本書である。ここには母親たちのホンネが納められている。

とくに家庭の中で大きな存在になっているテレビについて「これほど多数の人間が、これほどせっせと子どもの人間性を破壊することに精を出している奇怪な現実は、世界のどこを捜しても存在しない」として、テレビに奪われた母親の主導性の復権を求めている。筆者はＦＣＴ会員。（Ｔ）

●特集・女性史1926～89年―女性にとっての昭和―月刊「女性」、パド・ウィメンズ・オフィス、1989年２月。

「月刊・女性」（４月から女性情報に変更）は全国16紙の新聞に掲載された女性をテーマにした記事を切り抜き、毎月500～800点収録して刊行している。２月号は89年１月１日～31日の分を切り抜いているため、必然的に昭和史が特集テーマとなった。河北新報、毎日、朝日、琉球新報、読売、東京、日経などで女性の側からみた昭和史回顧の記事が掲載されたことがわかる。それをまとめて読めるから、資料として便利。

その他の切り抜きとしては、ひと、海外、労働、雇用機会均等法、企業の動き、高齢化社会、性、育児・保育、文化、スポーツ、本とデータなどのテーマ別に整理されている。

年間購読22,000円、１部2,000円。問合せ：東京・渋谷区代々木４－28－５、東都レジデンス410、パド・ウィメンズ・オフィス。（Ｍ）

FCT（子どものテレビの会・市民のテレビの会）はテレビの送り手と受け手と研究者が立場を超えて集い、より良いテレビの実現をめざし実証的研究と実践活動を積み重ねていくためのひろば＝フォーラムとして、1977年10月に創設されました。その運営は、創設以来、事務局スタッフのボランティアと全国の会員からの会費と提出金、定例のFCTフォーラム（研究会）参加費、及び、調査研究報告等のFCTオリジナル出版物販布からの収入により行なわれています。
ガゼット(Gazette)の年間講読のお申し込み、バックナンバーのお問い合わせは事務局へハガキか電話(03・721・8694)でどうぞ。